

第7回「森の広場」市民観察会

観察ガイドブック



キクザキイチゲ

日時: 2009年5月6日(水・祝日) 10:00~12:00

テーマ: 「春の野山をたのしもう!」

次第:	1. 受付	9:30~
	2. 開会式とオリエンテーション	10:00~
	3. 野外観察会	10:30~
	4. 解散	12:00

主催: 森の広場市民観察会実行委員会 (青森市内8団体参加構成)

共催: 新城縁故者委員会

後援: 青森市、東奥日報社、NHK青森放送局

「森の広場」設置の経緯

太平洋戦争後、合浦公園に建設された市営競輪場の郊外移転に選択されたのが新城財産区所有の森林地帯でした。当時新城財産区から譲り受けた森林約53haの内、競輪場建設に要した22haの残存森林の利用法として考えたのが「スポーツその他の多目的広場」だったようです。名称は「森の広場」とし、管理棟、研修室、トイレなどの他、野球場、ゲートボール場などを林野庁補助事業である「生活環境保全整備事業」で整備したもので、管理運営は青森市生涯学習課スポーツ振興チーム所管の施設となりました。しかし、残念ながら利用者は野球同好者だけで、他に山菜採りの人が訪れる程度だったため、周辺の手入れも疎かにされ、せっかく整備したミズパシヨウ観察路も崩落したままになっています。地元新城の住民ですら知らない場所で長い間眠った状態の施設でした。

この度の青森市内自然愛好諸団体の合同観察会をきっかけに一般市民への啓蒙を計り、将来的には「青森野草園」をも視野に入れた運動に発展できればと考えております。

遊歩道だけは毎年管理を委託されてきた「新城財産区縁故者委員会」の皆様により刈り払いが行われ、歩きやすく整備されております。四季折々の森林浴や草木の観察ルートとしてご利用下されば今回の合同観察会を企画した関係者一同の喜びでもあります。

市民観察会スタッフ一同 (2006.5)

森の広場市民観察会スタッフ(主催8団体、順不同)

「青森の自然環境を考える会」「ウオッチング青森」「青森・草と木の会」「樹木医会」
「青森野鳥の会」「森林インストラクター会」「青森自然誌懇話会」「やぶなべ会」

■ 生物観察のポイント

- [生育環境] どんな処にいましたか？
- [行動(動物)] どんな行動をしていますか？
- [状態(植物)] どんな状態(芽立ち・花・実など)ですか？
- [生物の種類] 特徴的な形や色を観察しましょう。スケッチなども有用です。
- その他気づいた点などをどンドンメモしましょう。自宅へ帰ってからメモを再確認しながら調べると、とても勉強になります。

春の植物(1)

キブシ (キブシ科)

早春に咲く花で、林縁に見られる低灌木。葉が出るより先に、穂状に垂れ下がるクリーム色の花穂は非常に目立つ。雌雄異株だが、その区別点は花の中を下から覗いて見れば分かる。昔の婦人は成人すると歯にお歯黒を塗る風習があり、後に既婚・未婚のサインにもなり、その材料に用いられた。



バッコヤナギ (ヤナギ科)

早春、膨らみ始めた花芽は赤い厚い皮の中からネズミ色の毛をまとった美しい花穂が現れる。雪解けの始まった頃の「ネコヤナギ」は早春の華材としても人気が高い。雪解けが終わった頃、写真のように細長い葯が伸びてくるのは雄株。桜の花が咲く頃、長い葯の伸びたバッコヤナギの花もよく目立つ。



ニワトコ (スイカズラ科)

低性灌木。春、円錐花序の中にたくさんの乳白色の小花を付ける。若い枝の髄を押し出して乾燥させたものを顕微鏡観察の際、組織標本の薄い切片を切り取る支持材(ビス)として古くから利用されてきた。若葉を山菜として利用する場合もあるが少量がよく、多量に食べると下痢を起こす。



オオバクロモジ (クスノキ科)

日当たりの良い林道周辺に普通に生えている灌木。皮付きのつま楊枝などに加工される。枝を折れば切り口に芳香があり、森林浴の疲れを癒してくれる。4月下旬～5月始め頃、開葉と同時に黄色の花を付ける。若い枝は滑らかで黄緑色を呈してるが、後に黒い斑点が多くなりほとんど黒色になる。樹皮は香水の原料として利用される。



春の植物(2)



ミズバショウ (サトイモ科)

森の広場では、4月下旬～5月上旬に咲く。調整池の上流の沢沿いに見事な群落を作っている。白く目立つ部分は仏炎苞(ぶつえんぼう)と呼ばれる花を保護する役割をはたす部分で、中心の黄色い部分が本当の花になる。



カタクリ (ユリ科)

浅虫の湯の島などで有名な早春を代表する花の一つ。種子が地面に落ちてから開花するまで8年くらいの時間がかかるそうだ。また、花の後に地上部が枯れて、一年の大半を球根のまま休眠する。森の広場でも観察できますが、数はあまり多くないようだ。



エンレイソウ (ユリ科)

大きな3枚の葉が輪生し、褐色の3枚の花びらをもつ花がその中央に着く。カタクリと同じ頃に開花する。この植物も開花まで十数年かかるそうだ。カタクリと同様、森の広場では数が少ないようだ。



タチシオデ (ユリ科)

雌雄異株(写真は雄株)。伸び始めの頃は直立するが、成長するにしたがってつる状になり、他の植物に寄りかかる。森の広場には、よく似た「シオデ」も確認されているが、花びらが反り返るので区別できる。

春の植物(3)

ブタナ (キク科)

ヨーロッパ原産の帰化植物。フランスの「ブタのサラダ」を訳して名付けられた。別名「タンポポモドキ」の名のように頭花はタンポポによく似ている。森の広場では、「花のゲレンデ」などで大群落をつくる事があった。



ミドリハコベ (ナデシコ科)

花びらは10枚のように見えるが、5枚が深裂している。ハコベの仲間はよく似ているので、区別が付きにくい。花柱の数・雄しべの数・花弁と萼片の長さなどに注目すると良いだろう。森の広場では、この他に「コハコベ」も確認されている。



ミツバアケビ (アケビ科)

熟した実の形から「開け実」と呼ばれたことから名付けられた。青森で見られる「アケビ」は、本種で「アケビ」は生育していない。「アケビ」の小葉は5枚だが、本種は3枚。実を食用とするほか、蔓をかご細工などに利用する。また、茎は生薬としても用いられる。



キクザキイチゲ (キンポウゲ科)

森の広場ではあちらこちらに大きな群落を作っているのが、春先に一番目立つ植物。花びらのように見えるのは、萼片。白い萼片のシロバナキクザキイチゲも観察できる。(花の拡大写真は表紙を参照)



スマレのなかま(1)



ナガハシスマレ (スマレ科)

長い距が特徴で別名テングスマレ。区別が付けにくいすみれのなかまの中では分かり易い。森の広場では四月～五月に林下で良く見られる。高さ十数cm程度。



スマレサイシン (スマレ科)

スマレのなかまでは大型で、花も葉も大きいので区別が付きやすい。森の広場での生育地は限られているようだ。花の色が白いシロバナスマレサイシンも同所に混在していた。



タチツボスマレ (スマレ科)

全国各地の早春にごく普通に見られるすみれ。よく似たオオタチツボスマレとは、距が紫色を帯びる事で区別ができる。ただし、分布が広く生育環境の変化も大きいので、個体変異も多く、変種・品種や近縁種との区別がつけにくい場合がある。



ツボスマレ (スマレ科)

花が小さく、白いので分かり易い。日本各地の湿った草地に生育する。名前の由来は、坪(つぼ、庭を表す)に生える堇。別名ニョイスミレ。

スマレのなかま(2)

オオタチツボスマレ (スマレ科)

北海道から九州の日本海側に生育する北方系のすみれ。タチツボスマレによく似るが、距の色が白い事で区別できる。



ミヤマスマレ (スマレ科)

本州中部では亜高山帯に生えるが、東北北部では低山でも見る事が出来る。森の広場では、他のすみれに比べて少し遅め(五月～六月)に花が咲く。



マルバケスマレ (スマレ科)

葉や葉柄にはたくさんの毛が生えている。寒冷地に生えるスマレで地下茎を生じないので株は孤立する事が多い。「森の広場」でも個体数は少ない。スマレの仲間では余り目立たない存在である。(別名エゾアオイスマレ)



「スマレのなかま(スマレ科)」の区別は、難しい面が有ります。葉や茎の形や付き方・毛の有無・距の状態・色などに着目して下さい。ただし、花の色は環境や生育状況によって変動する場合がありますので、注意が必要です。なお、森の広場では、12種類のすみれが確認されています。

[補注]

距(きよ):スマレやオダマキなどに見られる、がく片や花弁の一部が中空で突出している部分の事。

野鳥を観察してみよう

春～初夏は、鳥の恋の季節です。雄たちは雌のパートナーを探すためにさかんに鳴いています。姿を見つけられなくても鳴き声を聞いてみましょう。森の広場で確認された野鳥をリスト形式で紹介します。

カモ科	カルガモ
タカ科	トビ
	オオタカ
	ノスリ
ハト科	キジバト
	アオバト
カッコウ科	カッコウ
	ツツドリ
	ホトトギス
キツツキ科	アオゲラ
	アカゲラ
	コゲラ
ツバメ科	ツバメ
	イワツバメ
セキレイ科	キセキレイ
	ハクセキレイ
ヒヨドリ科	ヒヨドリ
モズ科	モズ
ミソサザイ科	ミソサザイ
ツグミ科	コルリ
	ノビタキ
	トラツグミ
	クロツグミ
	アカハラ
	ツグミ
ウグイス科	ヤブサメ
	ウグイス
	センダイムシクイ
	キクイタダキ
ヒタキ科	キビタキ
	オオルリ



キビタキ

エナガ科	エナガ
シジュウカラ科	コガラ
	ヒガラ
	ヤマガラ
	シジュウカラ
ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ
メジロ科	メジロ
ホオジロ科	ホオジロ
	カシラダカ
	アオジ
アトリ科	アトリ
	カワラヒワ
	マヒワ
	ベニマシコ
	ウソ
	イカル
	シメ
ハタオリドリ科	スズメ
ムクドリ科	コムクドリ
	ムクドリ
カラス科	カケス
	ハシボソガラス
	ハシブトガラス

以上 54種

動物(両生類・爬虫類)

ニホンアマガエル (アマガエル科)

最も普通に見られるカエルで、雨の降りそうな時に一斉に鳴く習性がある。体色は周囲の色調に合わせて色々変化する。草むらにいる場合はほとんど緑一色であるが、鼻孔から目の後方(鼓膜後方)にかけて黒斑があるので「アオガエル」属とは容易に区別できる。繁殖期は「ヤマアカガエル」や「アズマヒキガエル」に比べればやや遅く晩春～初夏の頃である。



アカハライモリ (科)

かつては青森市内全域にごく普通に棲息していた腹の赤い動物だったが、最近目撃されることは非常に希になっている。形態は「サンショウウオ」に似ているが、頭部骨格の基本的な構造が異なりサンショウウオ目と区別されている。好物はカエルのオタマジャクシ。



ヤマカガシ (ナミヘビ科)

体長は1m余。褐色の地に赤と黒の斑紋が交互に並びよく目立つ。首の付け根付近と奥歯に毒を持つが、事故例はマムシに比べて遥かに少なく、近年まで毒蛇と認識されていなかった。比較のおとなしいヘビなので、捕まえようとしないうちは、攻撃されることがほとんど無い。



ニホンカナヘビ (カナヘビ科)

日本各地の広い環境下に分布している日本固有種。昼行性なので、緑の多い宅地などでもよく見かけられる。体長は20cm前後。危険な目に遭うと尾を自切し、切れた尾は再生する。春から夏にかけ交尾し、その際に雄が雌の頭部から腹部にかけてを咬むため、雌の体にはV字型の咬み跡が残ることがある。



動物(昆虫類)



エゾイトトンボ (アオイトトンボ科)

体色はブルーのイトトンボで、6月頃から水辺で観察される。同じようにブルー系のイトトンボ類には「オゼイトトンボ」「ルリイトトンボ」がいるが、「オゼイトトンボ」は「エゾイトトンボ」と同じ環境に棲むので紛らわしい。腹部第2節背面の黒斑の形で区別できる。斑紋がトランプの「スペードマーク」であれば、「エゾイトトンボ」である。



クロスジギンヤンマ (ヤンマ科)

「ヤンマ」類の中では早春から出現するトンボで5月中旬には産卵を始めている。調整池の北岸では水際のヤナギなどの枝に多数の羽化殻が見られた。成虫の胸部は美しい黄緑で黒い力強い黒条が2本ある。「ギンヤンマ」は広く開放された水域を好むのに対し、「クロスジギンヤンマ」はやや狭い水域でも繁殖する。



ルリシジミ (シジミチョウ科)

春早くから出現する瑠璃色の小さなチョウで各地に普通。幼虫はマメ科の花やつぼみを食べる。ほとんど1年中見られる身近なチョウである。



ベニシジミ (シジミチョウ科)

最も普通のシジミチョウ。日当たりの良い場所が好きで、住宅地の小さな空き地から野山まで明るい場所なら何処にでも現れる。気温の高い夏には黒っぽい色調になるが、気温の低い春型の個体は朱色が鮮やかで美しい。食草は、スイバやギンギシなどで雑草を食べてくれる。生活力旺盛でたくましいチョウです。

動物(水辺の生きもの)

オオミズスマシ (ミズスマシ科)

水の上をスケーターの様に軽々と滑走する。この「オオミズスマシ」は「ミズスマシ」より一回り大きく、翅の末端に突起がある。「ミズスマシ類」の眼は特殊な四つ目構造で、水面上の餌と水中の餌を見分けられる構造になっている。くるくる回る動きの速い行動は天敵からの攻撃を防御するための行動と考えられている。



スジエビ (テナガエビ科)

淡水産のエビの仲間である「ヌカエビ」(青森県内の水田地帯～湿地に普通に棲息)よりはるかに大きく、♀では5cmほどにもなり食用にも利用されている。また、釣り餌としても利用され、販売されている場合もある。体はほとんど透明で黒い帯模様がある。分類上はテナガエビに近い種類で、肉食性である



ニホンザリガニ (アメリカザリガニ科)

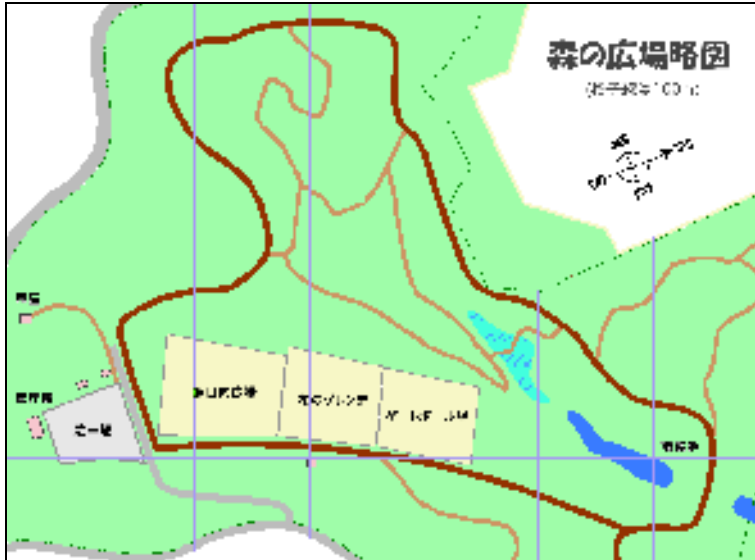
青森・秋田・岩手と北海道西部にのみ生息する日本固有種。絶滅危惧II類に指定されている。青森市内でも、かつては各地で見られたが年々数が減少している。「森の広場」では、2007年に生息が確認された。



メダカ (メダカ科)

北海道を除く日本各地の小川や水路などに分布。かつては童謡にも歌われるほど身近な存在で有ったが、生息環境の激変により、絶滅危惧種II類(絶滅の危惧が増大している)に指定されるようになった。メダカの方は多く、四千種類を超えるとされている。





■ 野外観察にあたってのご留意事項

■ 野外における危険性について

- ✓ 「森の広場」には、皮膚かぶれをおこす「ウルシ」などの植物や刺されるとショック状態を引き起こす「スズメバチ」などが生息しています。危険性を認知して行動して下さい。
- ✓ 「森の広場」の観察路は非常に良く整備されていますが、急勾配の部分も有ります。濡れた路面や水辺などで足を滑らせて怪我をしないよう、慎重な行動をとりましょう。
- ✓ 自然の中では、大なり小なりの危険性が伴いますので、ご自覚の上行動には充分ご注意下さい。

■ 野生生物の保護について

- ✓ 鳥や小動物などを驚かせないように静かに行動しましょう。
- ✓ 足で踏みつける事によって弱っていく植物が有ります。足下にも気を配り、観察路からはずれる事は最小限にしましょう。
- ✓ 生物の採集は、より良く観察するための手段の一つです。ただ、多くの人が採集などを行うと自然のバランスが崩れてしまいます。採集や切り取りなどは可能な限り控えて下さい。
- ✓ 「森の広場」は、そこに生息する生物たちの生活の場です。将来にわたって生き物たちが暮らせるよう、「彼らの世界に、私達がお邪魔している」という気配りで接しましょう。